

小中学生における剣道継続要因に関する研究

Study of endurance factor in kendo about primary and junior high school students

1K06B241

指導教員 主査 木村和彦先生

吉田 真久

副査 矢野尊之先生

1. 研究目的

人は様々な目的をもって剣道を実施する。浅見（1995）は、我が国の剣道を実践していた高校生および大学生が剣道をやめた理由として、「剣道に古風な風潮や心身の向上に対する効果があることを認めているものの、そのことと自らは剣道をスポーツとして捉えていることの間はずれが生じたこと」をあげている。生涯剣道を振興する上でも高校生や大学生になる前の小学生や中学生といった義務教育の時点での充実した剣道経験が以後の剣道観に影響すると考えられ、小中学生の剣道の継続要因に関して検討することは非常に重要である。このような考え方に基づき、「なぜ剣道を行っているのか」という継続要因を知ることによって、今後の剣道の指導法、剣道の普及方法の示唆を得ることができると考えている。以上のことを踏まえ、本研究は、小中学生における剣道の継続要因を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

質問項目：性別、年齢、所属、剣道経験年数、稽古場所、一週間あたりの稽古回数、一回あたりの稽古時間、剣道を始めた理由、効果、総合的な継続性、継続動機

調査対象：千葉県・東京都内の学校に通う小中学生 86 人

3. 結果・考察

剣道継続動機 15 項目について因子分析を行った。その結果 4 つの因子が抽出された。これらの因子の釈明及び命名については、原則とし

て因子負荷量が 0.400 以上の項目に着目して検討した。因子負荷量の高いものから釈明と検討を行い、先行研究を参考に 社会的態度の成長、剣道家への憧れ、剣道競技への憧れ、勝負志向と命名した。抽出した因子 4 つを独立変数、剣道をどれくらい続けていこうと思うかという総合的な継続性を従属変数として重回帰分析した。その結果、「剣道家への憧れ」という因子で標準化係数ベータが 0.325 と他の因子よりも高い値が出た。有意確率は 5 %水準で有意であった。また、効果の項目として質問した 5 つを独立変数、剣道をどれくらい続けていこうと思うかという総合的な継続性を従属変数として重回帰分析した。その結果、「面白い楽しい」という項目で標準化係数ベータが 0.338 と他の項目よりも高い値が出た。有意確率は 1 %水準で有意であった。

4. まとめ

本研究は、小中学生における剣道継続要因を明らかにすることを目的とした。その結果、小中学生の継続要因は効果・継続動機と「総合的な継続性」との関係から、剣道を教える指導者が技術的・人格的に優れている必要があり、そのような指導者に指導されることによってさらに剣道を続けようという継続性に影響を及ぼすことが明らかになった。以上のことから、小中学生に剣道を教える際は指導者の人間性と指導力を高めることによって剣道を長く続けようとする要因になると言える。

5. 今後の課題

本研究では小学生 43 人、中学生 43 人に被調査者となってもらった。その際、満足なサンプル数を集めることができなかった。そのため、偏った結果が出てしまった可能性が危惧される。今後は複数の小中学校の部活や剣道場、スポーツ少年団などを対象に調査を行う必要性を感じた。また、義務教育が終わった後の高校生・大学生の剣道実践者を対象に調査をした場合、違った結果が出てくるかもしれないので検証していくことは今後の重要な課題である。